

提出日：令和 3年 3月 5日

所 属： 獣医学部 動物応用科学科

氏 名： 水野谷 航 職位： 准教授

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

動物応用科学科の中で伝統的な畜産学に根付いた学問分野を教育する責任を感じている。畜産学も幅広い学問であるが、私は畜産物利用学(基本的には家畜由来の食品科学)教育を専門分野としており、担当授業科目もこの学問を幹としている。さらに他大学との比較で述べると、本学では食肉加工施設が充実しているため、この施設を活用した内容を取り入れている。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
食品製造学	動物応用科学科	選	3年次	69
食品科学	動物応用科学科	必	2年次	126
食品科学実習	動物応用科学科	選	3年次	61
食品機能学	動物応用科学科	選	3年次	88
畜産物利用学	獣医学科	選	3年次	143
専門ゼミ	動物応用科学科	選	3年次	11
科学の伝達	動物応用科学科	選	4年次	15
卒業論文	動物応用科学科	必	4年次	15
基礎ゼミ	動物応用科学科	必	1年次	9
生物学実験	動物応用科学科	必	1年次	142
地球共生系データサイエンス・同演習	全学	自	2年次	35
応用微生物学特論	獣医学研究科	選	1,2年次	2
畜産物利用学特論	獣医学研究科	選	1,2年次	1

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

学生にとってなぜ学ぶ必要があるのかを自覚できるような教育を目指す。大学・大学院教育は義務教育ではない(つまり学生からすると教育は与えられるものではなく自ら得る)ことを学生が自覚し、自主的な学習意欲を高める事が重要である。一方で私立大学である以上、授業料に見合う教育サービスを、それを望む学生(あるいは学費支援者)に与える点も忘れてはならないと考える(つまり、私立大学は塾や家庭教師の要素も含むと考える)。この両者は時に対立する命題である。教員はこの両者のバランスを見つつ、かつ時代背景にも配慮しながら対応する必要性を感じている。また、時代によって変わる以下の要因: 学生の基礎学力、産業規模(私の場合は畜産業、食肉関連産業、食品産業)、教育内容のアップデート項目、教育システム(リモート講義等)にも、臨機応変に対応していく方針を持って教育に取り組んでいる。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

アクティブラーニングについての取組

今年度はコロナ禍の影響もあり、遠隔で講義が実施され、対面で行うディスカッションは実施が困難であった(2019年度は毎回の講義の途中で、途中に一つトピックを提示し、学生 2-3 名同士で議論する時間を 10 分ほど設け、最後にその議論内容について概要を全員の前で発表させた)。代わりに講義の時間中に課題を提示し、講義時間内に学理に上げさせる手法を採用した。議論は難しいが自身で考える点では受け身だけにならない学習と言える。また Mentimeter というオンラインアンケートツールを利用し、クイズ大会の形式で講義内容の小テストを実施した。匿名で参加できるため、気軽に参加できる点で有用なツールである。この方式はエンターテインメント性が高いため、講義の緊張感を和らげる効果も得られる。

ICT の教育への活用

学理は今年度の講義を進める上で非常に重要な ICT ツールであった。具体的には出席、小テスト、講義資料の提供、講義後のフォローの資料提供、一斉連絡に利用した。また遠隔講義には Meet を用いた。また、上述の Mentimeter というオンラインアンケートツールも私の講義では重要な位置にある。現在、リモート講義の発展に合わせて、学生達の ICT 端末の所持率、リテラシーが急激に向上しており、ICT の活用のハードルも一気に下がったと言える。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

- ① 教育（授業，実習）の創意工夫（A～C） A
- ② 学生の理解度の把握（A～C） B
- ③ 学生の自学自習を促すための工夫（A～C） B
- ④ 学生とのコミュニケーション（質問への対応等）（A～C） A
- ⑤ 双方向授業への工夫（A～C） B

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

今年度の講義は遠隔講義が中心で、学生の様子を把握するのが困難であった。通信量の抑制のために Meet 上では学生のカメラはオフであったため、より一層の距離感を感じた。講義中の反応も見えない状況で、どれほど興味を持って講義に臨んでいるかも不透明な状況であった。理解度については小テストを行うことである程度把握できていたが、本人達の満足度が分からず、単純に小テストの点数だけで理解度を判断して良いものか難しい。もし遠隔講義が続くとしたら、中間に講義の理解度に関する記述式のアンケートを実施したいと思う。その結果を見ながら、前半の復習をしたり、あるいは逆に理解度が高ければ後半はより高度な内容を教えられるように調整していきたい。

5. 学生授業評価
<p>① <u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u></p> <p>2019 年度の授業評価では、特に「スライドの文字が小さくて読みにくい」というコメントが多かったので、できるだけスライドの文字は大きく作るように心がけた。また授業時間以外の予習・復習時間の評価が低かったので、学理の小テストは授業時間外に実施するように設定した。</p> <p>② <u>①の結果はどうでしたか。</u></p> <p>2020 年度は、遠隔講義が中心になったが、この場合スライドは各自の端末の画面で見えるため、文字の大きさは今年度は、ほとんど不満がなかった。つまり、遠隔であれば文字の大きさはそれほど大きな問題ではないのかも知れない。</p> <p>③ <u>②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。</u></p> <p>授業時間外の、学理の小テストは引き続き行いたい。</p>
6. 学生の学修成果
<p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u></p> <p>上述の Mentimeter というオンラインアンケートツールは学習意欲の向上に資する実感を得たので、今後とも利用したい。</p> <p>② <u>教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</u></p> <p>我々は食品を製造する実習や学問を教育しているため、実生活とも関わりが強い。食肉製品を実際に食した感想を聞くと非常に好意的なコメントが多く得られる。</p>
7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）
<p>FD研究会には参加するように心がけているが、業務の都合で出られないことも多い。その場合は、後で映像を見て情報を得ている。</p>
8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）
<p>卒業研究のような時間（単純な授業評価）で縛れない活動も立派な教育活動と思う。特に大学教員は研究者でもあり、研究と教育を上手に融合させていくことが目標である。研究活動を通じて得られる学習効果は座学や多人数での実習を大きく上回ると実感している。</p>
9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ